

「存在論」ノート

——「人間論」の科学的基礎づけをめざして——

玉 水 俊 哲

はじめに

従来の「存在」についての理論を検討して見る時、われわれは、そこに、ある一定の手続がなされているのを見い出す。

すなわち「存在」についての哲学的、科学的遺産とその発展の歴史を検討し、それらを批判的に摂取し、その遺産自身がなしとげえなかった理論、及び研究を、その内に含む方法において展開させること、その遺産が成立した時代の諸種の社会的状況との関連において捉えること、そして又、それらの時代における現実的効用性を実践の内で確かめる。という手続がそれである。

われわれは、それらの遺産を、上述の手続に拠って検討することで、「存在」の概念を得ることが可能である。しかし、それらの中に、「存在」とは何か、と問う仕方において、観念論的なものと、唯物論的な方法のあることを、われわれに知らせてくれる。前者は、人間の精神から出発し、つまり「存在」の観念から、「存在」の意味から出発し、後者は、現実の事物の動きから出発する。つまり「存在」するところのそのもの、から出発する。

それは、自然と精神。存在と意識。という最も重要な二局面の、どちらが本源的であり根本的であるか。という見方においてその立場を異にしている。

そこで、それらの遺産、つまり文献を検討し、それを整理する。というこのみでは、「存在論」の展開又は「存在」の意味は理解し得ても、「意識」や「実践」という人間の活動の現実的基礎としての「存在」とは、一体何か、ということは明かにはなっていない^①。しかし、われわれは、前述したように、「存在」の現実を分析する前に、「存在」についての、われわれの概念を明かにして置くことが必要である。いわば、「存在」の論理学を今は手前の問題として考えて見ようとするのである^②。そのかぎりにおいて、それらの遺産が内在的に考察されることになる。

戸坂潤は、「マルクス主義においては、一切の『科学』が哲学的なものであり、そうでなければならぬ。しかし他方、マルクス主義的認識内容に就いては、如何なる場合にも、内容と形式という二つのメントを区別することが出来、また区別し得なければならない」とし、

この場合、「形式としてのモメントは外でもない、論理及至（唯物）弁証法のことだ。」と述べている。そして、「この形式的モメントを特に取り出して取り扱うという形態で、問題提出の仕方をする、第一に必要な、そして中枢的な仕事は、弁証法的唯物論における諸根本概念の検討でなくてはなるまい。例えば、物質、意識、実践とは何であるか、という範疇の分析が何よりも問題となる。」と述べている。更に、「哲学的物質とは、では何か。それは外でもない、全く存在の概念なのである」この場合、さし当って、「存在するものに関する理論—存在論其他—より先に、存在という範疇に関する理論—論理学—が問題なのである。」と述べている。しかし、戸坂潤も述べているように、又、小稿でも後に見るように、存在するもの、とは、存在物であり、実体つまり内容なのであるが、そして、その内容がなければ、形式としてのモメントも出て来ないのであるが、物質の個々の特殊な形態を研究するまえに、何ものが存在する、又はしないというような、そういうこと自身を決定する処の存在という範疇が何か、をまず第一歩として考えようとするのである。

〔注〕

① 戸坂潤は、「歴史と弁証法—形而上学的範疇は哲学的範疇ではない—」『理想』第三〇号（昭和七年四月一日発行）において、存在論という言葉を対立的な意識の下に、明晰に使わなければならない。として次の様に述べている。「もし存在論と云うならば、夫は言葉通り、存在の理論でなければならない。……、無論、理論は理論である以上、

存在を一般化し、抽象し、その限り又之を形式化する。理論はいつも哲学的—存在論的—範疇と共に始まるのである。……理論（及至哲学）という生産的技術は存在という生まの材料を加工する代りに、すでに出来上っている処の加工品である哲学物・哲学個々の専売物を、処理するものに止まるのであってはならない。同書六六頁—六七頁

② 戸坂潤「実践的唯物論の哲学的基礎」『理想』第三八号（昭和八年三月一日発行）

なお、くわしくは戸坂論文前掲、及び『現代唯物論講話』（昭和十三年三月一日白楊社）を参照されたい。

(一)

「存在」という範疇は、「存在するもの」そのものをさす場合と、「存在すること」を意味する場合とに一応は分けることが可能である。前者は「存在物」そのものを意味し、後者は「存在する」である」ということの意味、すなわち、或る「存在」がどのようなか、という「存在」のイデア・形式をさしている。この場合、両者は、互に対立的関係にある。と捉えられる。例えば、地球という一つの天体は、自転という運動をしているが、この「自転している」という「存在」の形式が、地球の「存在」の根本であり、主体であるならば、「存在物」たる地球そのものは、客体の位置に置かれる。形式が「存在」の本質であるならば、「存在するもの」そのものは仮象でなければならない。例で云えば、「自転している」という「存在」の形式が本質なのであるから、地球そのものは、その形式を表す内容である。つま

り仮象である。形式の具体化として地球が「ある」のである。更に、地球そのものも、他に何か本質的存在というものがあって、地球という形式によって「存在する」仮象として「ある」のである。地球にあっては、地球であることが非本質的になってくる。例えば、リングはリングとしてあることが問題にはならず、くだものという一般的表象として問題にされるとすれば、「実際の多くのくだものからえられた抽象的な表象である『くだもの一般』が、わたしの外に実在する本質であり、結局、ナシとかリングとかそういうものは——思弁的にいつて——『くだもの一般』を、ナシやリング……などの『実体』であると言明することになる。……だからわたしは、リングやナシ……などを『くだもの一般』のたんなる存在の仕方、様相であると説明する。」^①だから、地球なら地球という現実的「存在物」は、形式（それが本質だと考えられている）から外化された抽象的外在態として自己を定立する。すなわち「存在物」（実体）である地球は、抽象的な「存在」であって、現実の内容を持った、自然存在とはならない。仮にそれが自然存在という形態を与えられたとしても、それは「存在」の本質、主体としての形式の仮の姿として観念される。

しかしながら、地球は、形式から外化された抽象的外在態である、と否にかかわらず、現実の自然存在であり、「存在物」たる「物質」である。地球は、われわれがそれを意識する、しない、にかかわらずに、「存在」し続けてい、自転し続けている。「自然科学は、人類以前に地球が存在していたという、自己の主張が真理であることに、疑

いを挟むことを許さない。……地球は人類以前に存在していたという自然科学の主張は、客観的真理である。」^②

「質料（物質）の概念は云うまでもなく形相（形式）の概念に対立する。で、形相が存在ならば、質料（物質）は無でなければならぬわけである。」^③つまり「存在物」∥「物質」が無であるということ、この無の観念は、形相（形式）∥「存在」という「存在」がすなわち有という概念では、この「存在」自身が片づかないことが意識された時に浮び上ってくる。「そこでこうなる、存在は本当は形相（形式）としては把握出来ない、それはむしろ、より高度の概念によって、質料（物質）の概念によって、把握される外はない。質料（物質）は無どころではない、それこそ本当に充ち溢れた存在だ、ということになる。」^④

しかし、形式から「物質」が外化される。ということ、形式∥「存在」の抽象的外在態が「物質」（実体）である。ということは、それは一つの自己発展を意味せねばならない。形式∥有であるからには、前述したように内容∥無でなければならなかった。このように内容が無であること、という観念の自覚によって、自然対精神における精神の優位が確立する。すなわち、無の観念に絶対的に支えられた精神の絶対有が出て来る。

この精神の自己発展、産出行為、これが「弁証法」であると考えられた。このような精神の、頭の中の「弁証法」は、次のように展開して「絶対的理念」に到着する。それは、精神より出て行ってそこに「奪回」されつつある「存在」として無を、すなわち自然を、「存在物」

「物質」を定立する。

しかし、「存在」は、無に根ざしているところの——実は無どころではない、充ち溢れた存在——ものでなければならなかった。つまり無から出て来る。それが「存在」なのであるから「無と存在との統一こそ、本当の存在なのである。物質とは無と存在との統一として真の存在である」^⑤。しかし「無とは元来そんな神秘的な範疇ではない筈なので、全く物質的な・唯物論的な・範疇、物質それ自身に外ならぬ。

……無から存在が出て来る——ということは、合理的に云えば外でもない、物質（質料）から形相が出て来るということだ」^⑥。

上述のように、精神から「物質」が出て来る場合でも、「物質」から形相（形式）が出て来る場合でも、それは、自己発展を意味せねばならない訳である。すなわち「弁証法」形式が止揚されて内容（実体）が定立され、止揚された内容が「存在」であるならば、「止揚された存在は本質であり、止揚された本質は概念であり、止揚された概念は……客観性に等しく、止揚された客観性は……絶対的理念である。しかし、絶対的理念とはいったい何であろうか。絶対的理念は、もしそれがふたたび抽象行為全部をはじめから閲歴しようとせず、そして自分が諸抽象体の総体、あるいは自己を把握しつつある抽象態であることに満足しようとしなければ、ふたたび自己自身を止揚する。しかし、自己を抽象態として把握する抽象は、自己を無として知るわけである。それゆえそれは、自己をすなわち抽象態を放棄しなければならぬ。こうして抽象は、ちょうど自分の正反対であるもの、つまり自

然のもとに到達することになる」^⑦。このようにして、自己を無として知った絶対的理念は、それが導出されたところの「弁証法」の論理の必然性によって、直接にはマルクスの手によって、内容（実体）が「存在」の主体であり「存在物」であり自然（物質）であることを知る。と同時に、自己を「物質」からの抽象態として観念することによって、この「弁証法」はひっくり返って自然のものとなる。

ここで又問題にして見なければならないのは、絶対的理念それ自身が、現実の「存在物」である実体「物質」を、例えば、地球を、地球の観念ではなく、地球の抽象的表象ではなく、現実「存在」し続け、自転し続けている地球そのものを、どのようにして生み出すのであろうか。ということである。上述の「くだもの一般」の例をとれば「実際のくだものから抽象的表象である『くだもの一般』をつくり出すことは大へんやさしいことだが、抽象的表象である『くだもの一般』から実際のくだものをつくり出すことは、ひじょうにむずかしい。しかも抽象をすてないかぎり、抽象から抽象の反対物に達することは不可能である」^⑧。だから絶対的理念それ自身から現実「存在物」に「物質」が生み出される。とする観念論的弁証法は、実際の「物質」とその運動の前で立止る。なぜならば、抽象的表象や、絶対的理念それ自身が、現実的实在物を生み出した。という事実は、かつてなかったし、あり得ないからである。

こうして、この虚構の、頭の中の、弁証法は、その論理自身の持っている必然性によって、完全に、反対物へ、つまり自分が出て来た所

へ帰る。^⑩

以上述べて来たことは、諸物が形式から、又、絶対的理念から外化されたのではなくて、自己発展によって生み出されたのではなくて、現実「存在」する諸物が、その自己発展、自己産出において形式を作るのだ、ということに外ならない。又、それがわれわれ人間の脳に反映して、地球なら地球の、リングならリングの、観念を生み出すのである。現実「存在」する「物質」それら諸物が、運動において形式を生むのだ、ということ、そのような諸物、「物質」とは、それ自身で「自己発展することによって自らの形式を造り出して行く処の、運動そのものを意味せねばならないわけである。物質とはその個有な運動によって自分に形式を与えて行くような内容のことなのである」^⑪とするならば、「存在」とは「存在物」であり「物質」のことであり、

「物質」とは、自己運動し、その内容によって形式を産出するところの、現実的実在物である諸物のことなのでなければならぬ訳である。そして「運動は物質の存在様式である。運動のない物質は、いつでもにもなかった。または、いつでもにもありえない」し又「運動のない物質は、物質のない運動と同様に考えられないものである」^⑫

そして、「物質が運動するのは或る循環の中である。……そしてこの循環の中では永遠に変化しつつあり、永遠に運動しつつある物質とこの物質がそれに従って運動し変化するところの諸法則以外には何一つとして永久的ではない」^⑬このような物質の自己運動は、「物質・存在が弁証法的なものだ」ということの他の何ごとでもない」^⑭というこ

とを意味せねばならない。だから、弁証法とは外ならない「物質」の運動の法則性であって、頭の中の弁証法そのものの展開において物質が産出されて来たのではなく、又は、そのような弁証法それ自身が物質の運動を規定するのでもないのは当然であらねばならない。

こうして、「物質」が形式を産出する。ということは、形式を産出する現実性をその内容として持つ、ということに外ならない。形式は、ここではじめて、「物質」の個有な自己運動によって産出されたところの、現実「存在」を持った現実の存在物——これがまさに「物質」なのだ——の属性になる。又その運動が、実際の弁証法——これがまさに自然の弁証法なのだ——存在の形式なのである。

〔注〕

① マルクス・エンゲルス「聖家族——批判的批判の批判——」新潮版マルクス・エンゲルス選集第一巻『ヘーゲル批判』一二二頁。以下断りないかぎり、マルクス・エンゲルスの著作に関しては、新潮版「選集」と略記する。

② レーニン「唯物論と経験批判論」大月版『レーニン全集』第一四巻一四二頁。なおレーニンの著作に関しては、以下断りないかぎり同全集「全集」と略記する。又、戸坂潤は、「歴史と弁証法——形而上学的範疇は哲学的範疇ではない——」『理想』第三〇号、昭和七年四月一日六六頁、前項①においての中略の分節で「もし存在論と云うならば、夫は言葉通り、存在の理論でなければならぬ。存在から区別されるべき存在に就いての観念や概念や理念、存在から区別されるべき存在の仕方や形式又は形相、存在から区別されるべき存在の基底や本質、又最後に、存在から区別されるであろう「事実」等々、凡そそ

う云った存在からの哲学的分泌物——夫が如何に根本存在と呼ばれようとも——に就いての理論が、存在論であつてはならない。——存在とは常に存在する處のそのものである。」と述べ形而上学的範疇を退け、「理論はいつも哲学的——存在論的——範疇と共に始まるのである」としている。そして「理論は理論である以上、存在を、一般化し、抽象しその限り又之を形式化す」けれども、それは、「存在を、存在の哲学的導来物を以て置き換えることにはならない。」としている。そして「哲学的範疇による世界観と形而上学的範疇による世界観とで、世界の（存在の）秩序が全く逆に云い表わされているのを、吾々は注意しなければならぬ。」（内玉水、と云っている。

③ 戸坂潤「実践的唯物論の哲學的基礎——物質と模写とに關して——」『理想』三八号、昭和八年三月一日。一二頁。

④ 戸坂潤 前掲③一二頁。

⑤ 戸坂潤 前掲③二三頁。ヘーゲルは、「論理学」『世界大思想全集』第四〇卷「論理学」八〇頁。において、「無は斯かる直接的なるそれ自身自同的なものとしては、また反対に存在のある所のものと同一である。それ故存在の真理も無の真理も兩者の統一である。而してこの統一は生成である」と述べている。なおヘーゲルは自己の論理学を、同書、七六頁において次の様に三つの部分に分けてゐる。

一、存在論。

二、本質論。

三、概念及び理念論。

即ち思想に就いての次の如き諸理論に分かれる。

一、その直接性に於けるもの——即自に於ける概念。

二、その反省及び媒介に於けるもの——概念の対自的存在及び概念の仮象。

三、その己れ自らへ帰還的存在及びその發展せる機自的存在に於けるもの——即且対自に於ける概念。

訳者、岩崎勉氏は、同書八頁において、「ヘーゲルに於ける論理学は、

……存在の論理学である。」と云っているが、その「存在」の概念は、物質を指すという根拠はどこにもない。

なおヘーゲルの「存在」の概念についてのくわしくは、同書、七八頁―八四頁を参照されたい。

⑥ 戸坂潤前掲③一三頁。

⑦ この点線の内は、マルクスにおいては省略されているが、玉水がマルクス「ヘーゲルの弁証法・哲学一般の批判」『選集』第一卷二二頁から引用して補足したものの。

⑧ マルクス『選集』第一卷二五頁。エンゲルスは、『フォイエルバッハ論』岩波文庫版七六頁―七七頁において、「ヘーゲルにあつては、弁証法とは概念の自己發展である。絶対概念なるものは永久の昔から——何處か知らぬが——現存しているばかりでなく存立している全世界の本統の生ける靈魂なのである。……絶対概念は、自己を『外化』して自然に転化する。自然の中では、自己を意識することなしに、自然的必然性の姿を取つて、新たな發展をして、遂に人間の中で再び自己意識に到達する。この自己意識は今度はまた、歴史の中で再び荒削りから段々と仕上げられる。そして最後に、絶対概念はヘーゲル哲学において再び完全に自己に帰るのである。」と言っている。したがって、マルクスとエンゲルスにあつては、この概念の自己運動の顛倒は取り除かれ「概念弁証法論そのものは、實在世界の弁証法的運動の單なる意識的反映にすぎなくなり、かくしてヘーゲルの弁証法は、頭で立っていたのが再び脚で立つようになされた。」のである。

⑨ マルクス「ヘーゲル弁証法と哲学一般の批判」は、この命題が示すように、ヘーゲル弁証法に対する批判であるが、特に論理学に觸れて、「論理学全体は抽象的思惟がそれだけでは無であること、絶対的理念がそれだけでは無であること、自然に至つてはじめて何ものであること、の証明である。」と云っている。『選集』第一卷二五頁。

⑩ マルクス「聖家族」『選集』第一卷二三頁。

⑪ エンゲルスは『自然の弁証法』岩波文庫版上巻四〇頁において、

「頭の中の弁証法は実在世界の、自然の、同じく歴史の、運動諸形態の照り返しに過ぎない。」と云っている。くわしくは、同頁、及び⑧、マルクス『資本論』第二版への後書き、青木書店版 八六頁。などを参照されたい。

⑫ 戸坂潤 前掲③一四頁。

⑬ エンゲルス「反デュリング論」『選集』第二一卷五五頁～五六頁。

⑭ エンゲルス『自然の弁証法』岩波文庫版 上巻 四五頁～四六頁。

⑮ 戸坂潤『現代唯物論講話』白楊社、昭和一三年三月一日一六頁。

(二)

前項に見て来たように、運動が「物質」に個有のものであるならば、「物質」(内容)は自己運動によって、自らの形式を自分に与えて行くということであった。しかし、この自己運動は、同一円環上の循環運動ではなく、自己発展によって、自らの形式を変えて行く、新しい形式を自らの発展によって生産して行く、ということの意味しなければならぬ。そして、この生産された新しい形式は、「物質」(内容)の新しい形態を意味する。「物質」に於て、内容は次のようにして形式を生産して行く。内容Aがその自己運動・自己発展・によって、自分自身の内から或る一定の抽象態を抽出する。運動というものが弁証法的である限り、かゝる自己抽出は必然的である。この抽出物が形式aであり、ここでAは形式aの内容だったということになる。処が形式aは単に内容Aの形式であるばかりでなく同時にAからaが抽出されたという新しい状態(A—a・と書こう)に対する形式的内容でも

なくてはならぬ。即ちこの際内容Aは形式aを抽出することによって、すでに内容、B=〔A+(A—a)〕にまで発展しているのであり、それは同時に又、次の形式の内容だったということにならねばならぬ。以下之に準じて、内容は形式を生産して行く。そして又之によって内容が発達して行く。……従つて内容と形式とは交互作用に於て相互に生産し合うというように見えるかも知れないが、そういう交互作用そのものが、実は、内容から生産されるのだということを忘れてはならぬ^①。訳である。

われわれが、前項において見たように、形式とは、「物質」(内容)の自己発展において与えられるもの、つまり「物質」とは、そのような現実性を自ら表現している現実の存在物であった。「物質」がそのような現実の存在物であるならば、質と量を持っていなければならぬ^②。

或る「物質」の量的変化は、質的転換の契機を、ある一定の条件のもとで、与える。又質的転換は、「物質」の内実としての量的変化をその内に含んでいる。例えば、よく知られていることであるが、「水」は、標準気圧のもとでは、摂氏零度で液体状態から固体状態に移行し、摂氏一〇〇度で液体状態から気体状態に移行する。したがつてこの場合には、この二つの転換点において温度の単なる量的変化が水の質的变化した状態をひき起すのである。^③又例えば、コップーパイの水を分割して行くと、われわれは、およそ「水」というものとは質的に異つた原子の化合物に出会う。つまり水素原子二個と酸素原子一個の化合

物、分子である。更に分割すると、それぞれの原子に分かれてしまふ。水素原子なら、原子核一個とその廻りを運動する電子一個である。現代の原子物理学の発展は、それぞれを更に分けることが可能であることとをわれわれに教えてくれる。つまり素粒子である。最早普通教育を受けた者なら誰でも知っていることである。そしてわれわれは、そのような核分裂の、この地球上での人為的可能性とその連鎖反応が、どのような人々の手によって、外ならない日本において、どのようなことを可能にしたかを、忘れることはできない。

さて、もとにもどうう。要するに、量的変化が質的転換を引起す、ということとは、次のように云い得る。「自然界にあつては、それぞれ一々の場合場合に対して厳密に確定している或る仕方で、質的な諸変化はただ物質或は運動（いわゆるエネルギー）の量的な附加、或は量的な減却、によってのみ起り得る。」^③と。又社会の中においてもそれらは見られる。唯、非常に複雑な様相の内にその姿を現す。ということが多いだけである。例えば、「多数人の協業、多数の力の一つの総力への融合は、マルクスの言葉で云えば、一つの『新たな力能』を産み出し、これは、彼らの個別諸力の合計とは本質的に異なるものである。」^④又例えば、或る商品が、他の数多くの商品から等価形態を押しつけられることによって、もとの商品と質的に異つた。一般的等価形態の位置に置かれ、この商品の自然形態とこの一般的等価形態が癒着して、特殊な商品＝貨幣に転化して行く必然性は、マルクスによって明確に与えられている。^⑤

このような実例は、物質の運動の諸法則、それが弁証法であることの一面を表わしている。そして何よりも、今日の自然科学の進歩自体が、それをはっきりと物語っている。なぜならば、自然科学者が、それを認識するとしなやかにかかわらず、対象物のこのような運動なしには自然科学自身を考えることができず、まさにこのことの認識によつてのみ、自然科学が進歩して来たのである。だから、「自然科学自身が自然の弁証法を反映するものである」と云われるのである。そして又、「経験的な自然科学」の躍動が、「輝かしい諸結果に達し」これによつて「十八世紀の機械的な一面性が」克服されたばかりでなく「自然科学自身が（力学、物理学、化学、生物学その他の）様々な研究領域の自然自身の中に存在している諸々のつながりの検出によつて一つの経験的な学問から理論的な学問へと転化し、そして獲得せられたものの総括のもとに唯物論的な自然認識の体系へと転化したほどである」^⑦のだから。

このような「物質」の運動の一定の形態は、「物質」をそれによつて実現するのであり、その「物質」が何であるかを示す。それが現実性を内容として持つところの、現実の存在物、存在するもの、それ自身、つまり「物質」の現実の弁証法＝唯物弁証法、なのである。だから「物質」とは、現実の自然存在でなければならず、自然とはそのような運動をする諸物、刻々に変化し続けている諸物の総合的な概念なのである。

さて、われわれにあつては、上述して来たように、存在の範疇とは「物

質」であり、現実性であり、その運動においては、弁証法であつた。運動はそれ自体が矛盾である。「物質」はだから運動の必然性と共に矛盾の必然性をも自分の内と外に持っている。例えば、われわれ人間は、大氣中より酸素を採入れ、食物を採って生きているが、同時に炭酸ガスや老廃物を体外に排出し、いる。各組織は、刻々に細胞分裂を行い、刻々に死んでいる。それは、人間にとっては直接に生命の生産であり、自然にとっては消費である。又その生命現象は、別の表現をすれば、その一刻一刻を死んでいるから生き得ているのであり、死を生産することによつてのみ生きていられるのである。もしこの体外への排出を止めれば死——それは人間の生命現象全般の終止——が訪れる。このような生産と消費、生と死のような矛盾を、その刻々に作り出しているからこそ、生きているのである。この矛盾をその時々解決して行く過程、それが生命現象という運動に外ならない。又「物質」は、その運動において、例えば「単純な機械的場所的運動でさえも、それが行われうるのは、一つの物体が一つの同じ瞬間にある一つの場所にあるりながら同時に他の場所にあることすなわち、一つの同じ場所にあるとともにそこにあること、によるほかはない」^⑧このような矛盾を不斷に定立し、変化、発展において同時に解決しているのである。そして、このような対立物の自己生産、つまり自己二重化の過程とそれの同時的解決、これが運動なのである。

この対立物の自己生産は、例えば、人間は、自然から見れば、自然史の過程の必然的産物である、自然存在であると同時に、人間の合目

的的活動によつて、自然を自己の対象として持つ対自然的存在である。自然に対してある存在である。それは、人間の生産活動によつて社会を形成する社会的存在でもある^⑨。これは、全自然史の過程から見れば、全自然と自然の一部との関係として現われる。自然から見れば、自己二重化の過程である。

又例えば、

数学では——十と一。微分と積分。

力学では、——作用と反作用。

物理学では——陽電気と陰電気。

化学では、——原子の化合と分解。

社会科学では——階級闘争。

など^⑩。あらゆる時と所に見られる対立物の統一と分裂とは、「すべて自然（精神と社会を含む）の現象と過程の上に、相矛盾した、互いに排除し合う、相対立した傾向を認めること（発見すること）を意味する。世界の一切の過程を、その『自己運動』において、その自然的発展において、その生き生きとした存在において認識する条件は、それを対立物の統一として認識すること」^⑪なのであるから、「われわれが諸物をそれらの運動、それらの変化、それらの生命において、それらの相互作用において考察するやいなや……われわれはたちまち矛盾におちいる。運動そのものが一つの矛盾である……この矛盾の不斷の定立とその同時的解決、これがまさに運動なのである」^⑫こうしてわれわれは、「物質」の現実性と運動、そこから生じる矛盾——これは、

対立物の闘争として——現実の矛盾として把握することになる。同時に、「物質」一般とその運動——弁証法一般を論理的に捉え得たと言えるであろう。

「物質」とは、その自己発展によって自からの形式を自ら与えて行くような現実性をその内容として持ち、個有の運動によって自己変化する、対立物の自己生産、矛盾の不断の定立とその同時的解決——つまり運動——を行うところの、現実実に実在する諸物、常に変化し、進化している諸物のことなのである。

〔注〕

- ① 戸坂潤『現代唯物論講話』白楊社、昭和十三年三月一日、一八頁。
 - ② エンゲルス「反デュリング論」『選集』第一巻 一二〇頁。
 - ③ エンゲルス「自然の弁証法」岩波文庫版、上巻 八一頁。
 - ④ エンゲルス前掲、②一二〇頁。
 - ⑤ マルクス『資本論』第一篇「商品と貨幣」特に第一章「商品」を参照されたい。
- なお、量と質の転換に関しては、エンゲルス、前掲②一一三頁——一二二頁、又は、エンゲルス「自然の弁証法」岩波文庫版上巻七九頁——八九頁を、又、ヘーゲルのそれについては、『エンケクロペディ』論理学」第一部「存在論」『世界大思想全集』第四〇巻、岩崎勉訳「論理学」七七頁——九五頁を参照されたい。
- ⑥ 武谷三男『弁証法の諸問題』四一頁。又、エンゲルス前掲③九〇頁、を参照されたい。
 - ⑦ エンゲルス「自然の弁証法」岩波文庫版下巻 三〇頁。又、レーニンは、「唯物論と経験批判論」『全集』第一四卷三三六頁において「新しい物理学は、物質の新しい種類やその新しい運動形態を発見するこ

とによって、古い物理学的概念の崩壊を機会に古い哲学的問題を提起した。」と云っている。又、同書三五六頁において「唯物論の基本的特徴は、まさに、それが科学の客観性から、科学によって反映される客観的実在の承認から出発する。ところが観念論は、客観性をなんらかの仕方で精神、意識、「心理的なもの」から「導きだす」ために「回り道」を必要とする。」と云っている。又「人民の友とは何か」『全集』第一巻一三七頁。「戦闘的唯物論の意義について」『全集』第三三卷二五四頁。などを参照されたい。

⑧ エンゲルス前掲②一一四頁。

⑨ この「自然存在」「対象的存在」については、マルクス「ヘーゲルの弁証法と哲学一般の批判」『選集』第一巻一六頁——一七頁を参照されたい。そこでマルクスは、「しかし人間は、ただ自然存在であるばかりではなく、人間的な自然存在である。すなわち、人間は自分自身に對してある存在であり、それゆえ類的存在であって、人間はそのような存在として、その存在においてもその知識においても、自己を確証し、活動しなければならぬ。……自然は——客体的にも——主体的にも、直接的に人間の本質に適するように存在してはいない。」と云っている。この分節はマルクス自身の手によって一度消されたものである。しかし、この部分には、後にマルクス自身によって完成され、証明されたところのあの拡大な理論の試作が見られる。その意味においても重要な部分であると考えられる。ここにはいわゆる「労働」の概念は、まだ出て来ていないが、われわれは、マルクスの後の諸著作を検討する時、ここに未完成ながら提出されている問題の重要性を見る事が出来る。しかし、われわれはこの問題には後に触れることにする。われわれは小稿の内においては、これが「例」以上の意味を持つことを今の所期待してはいけない。なぜならば、「人間の生産活動」——「社会」——「社会的存在」を、まだ充分には論じていない。これは、本論文の後において重要な部分になるはずである。

⑩ レーニン「弁証法の問題に寄せて」『唯物論と経験批判論』岩波文

⑪ レーニン前掲⑨同頁。

⑫ エンゲルス前掲②一一四頁。

(三)

われわれは、前項までに見て来たように、「物質」とは現実の個々の諸物の哲学的抽象概念であり、「哲学的物質」とは、まさに存在の概念なのであった。

「物質とは、人間にその感覚においてあたえられており、われわれの感覚から独立して存在しながら、われわれの感覚によって模写され、撮影され、反映される客観的實在を言いあらわすための哲学的範疇である」^①から、

「物質そのものなるものは一つの純然たる思考創造物であり抽象である。われわれは諸物の質的な諸々の差異を無視し、これによってわれわれは諸物を物的に現存しているものとして物質なる概念のみに総括する」^②。

このようにしてわれわれは、存在が存在物、物質、であることを、そして、その自己発展の運動の仕方弁証法として見て来た。

しかし、物質そのもの、運動そのもの、とはだからまだ誰も見たことも経験したこともない。それは「ただ様々の、現実に存在している、物質と運動諸形態とを経験するだけなのだから。物料、物質、とはこの概念をそれから抽出し来った諸々の物料の総体以外の何物でもなく、

運動そのものとはすべて感性的に知覚することのできる運動諸形態の総体以外の何物でもない。物質また運動というような言葉は、それによってわれわれが感性的に知覚することのできる様々の沢山の物をそれらの共通な諸特性に従って総括する要約以外の何ものでもない。だから物質も運動も個々の諸物質と運動諸形態との研究による以外には全然認識され得ないのであり、われわれはこれら後者を認識することによってまたそれだけ物質そのものや運動そのものをも認識する」^③。訳である。だからわれわれが、物質の運動を現実のものとして把握しようとするならば、われわれ人間の認識が、現実の諸物質の現象形態、その内容の各段階的分析を通して本質を、そしてそこからの抽象物である理論を、現実の実践の中においてのみ試されることによって可能となる。とするならば、物質の各発展段階において、科学的に把握すべきであって、その科学的認識を除いては、ほかに物質の形而上学的認識は可能ではない。

「自然科学の対象——それは運動している物質、諸物体、諸物体は運動から切り離されるものではない。それらの形態も種類もただ運動においてだけ認識される。運動を除いての、他の諸物体との一切の関係を除いての、諸物体については何も云えない。運動の中ではじめて物体は自分は何であるかを示す。それ故、自然科学は諸物体をそれら相互の関係の中で、運動の中で、観察することによって認識される。様々の運動形態の認識は諸物体の認識である。だからこれらの様々の運動形態の研究が自然科学の主要対象」^④なのである。

この、物質の「運動諸形態」を考える時に、エネルギーの不滅の法則は、決定的に重要である。このエネルギー転化の証明は「自然における無数の作用する原因のすべて——機械的な力、熱、輻射（光及輻射熱）、電気、磁気、化合と分解の化学力——は今では一個同一のエネルギーすなわち運動、の特殊な諸形態、定在諸様式、として証明されている。われわれは運動の一つの形態から他の形態へと自然において絶えず進行している転化を証明し得る」⑤だから、自然界において存在する諸物質は、個々ばらばらに無関係に運動しているのではなく、一定の法則を持って統一されている。「自然界におけるあらゆる運動の統一はもはや一つの哲学的な主張ではなく、実に一つの自然科学的な事実なのである」⑥。

次に、時間的にはこの方が早い第二の重要な発見、有機体の細胞の発見、「この発見によつてはじめて有機的な、生きている、自然産物の研究——が確固たる礎地を受け取った。有機体の発生、生長、並に構造の神秘が剥ぎとられた。従来不可能とされた不可思議はあらゆる多細胞有機体に対して本質的に同一な或る法則に従つて実現している一過程に解消してしまった」⑦のであった。

しかし、これだけでは、現実存在する有機体の、つまり植物、動物、そして人間、という、そしてそれぞれの内での、この多様性を必ずしも明かにはしない。

そこで、第三の発見、ダーウィンの進化論が、この疑問に答えることになる。しかし、われわれは、このダーウィンの残した偉大な遺産

が、今日の科学に及ぼした影響の大きさに目を見はると共に、それが受継れて行く過程で、非常に困難な問題状況を現わしたことを知る。⑧
しかしわれわれは、ここでは、次のこと、つまり「少数の簡単なものから今日われわれがまのあたり見るような間断なき多種多様の層一層複雑なものへの、そして人間に到るまでの、有機体の進化系列はその大体の輪郭においては証明されている」⑨ということに注目するに止めよう。そして、それで、この問題に関するかぎりは充分である。

このようにしてわれわれは、物質が、その変化、発展において、進化において、多様性の内にある、或る普遍的なものによつて統一されているのを見出す。「だから、もしわれわれがあらゆる物体——星雲から人間まで——の上に等しく適合する普遍的な自然諸法則について語ろうとすれば、われわれにはただ重力と、エネルギーの転化の理論、通称機械的熱理論、の多分最も一般的な把握、とだけが残る位なものである。ところがこの理論自身が、すべての自然現象へのこの理論の普遍的な一貫した貫徹をもつて、一つの宇宙系においてその発生からその消滅に到るまでの次々に起っている諸変化の歴史的な一叙述に転化し、従つて一つの歴史に転化し、この歴史の中では各段階の上で別な諸法則、換言すれば同じ普遍的な運動の別な現象形態が支配する、そしてこの故に徹底的に普遍妥当なものとしては——運動以外には何も残らない」⑩。

上述に見て来たように、運動が物質の存在様式であり、全存在物に普遍妥当なものであるとするならば、つまり、運動する物質が、それ

を、われわれが意識するとしなにかかわりなく、客観的に存在するとされるならば、時間と空間は、この物質の運動の實在性に根ざしていなければならない。「物質のこの二つの現存形態は、物質なしでは当然に無であり、ただわれわれの頭の中にだけ存在する空虚な観念抽象である」^①わけであるから「いっさいの存在の根本形式は空間と時間であって、時間の外にある存在なるものは、空間の外にある存在なるものと同じく、甚だしい無意味」^②であるわけである。「すなわち、物または物体がたんなる現象や、感覚の複合ではなく、われわれの感官に作用する客観的實在であるように、空間と時間もまたたんなる現象の形式ではなく、存在の客観的——實在的な形式である。世界には運動する物質以外のものもなく、そして運動する物質は、空間と時間のなか以外では運動することができない」^③すなわち、空間と時間は、物質の實在性と連続性の、実際の存在の形式なのであるから、物質の発展は、この内においてのみ可能となる。そして「われわれの発展する時間と空間の概念は客観的に實在的な時間と空間を反映するもの」^④なのである。だから、われわれが、時間的空間的發展と云う時には、そこに現実に實在する運動する物質の発展においてのみ捉えられ与えられる概念でなければならない。このことによつてのみ、時間と空間は、現實性を与えられる土台を獲得する。

そこで、このような物質の運動が、物質に個有である。ということ、運動が物質の存在様式として、普遍である。ということに外ならない。

これは、物質が、運動において自己変化すること、運動において自己に對立的なものを自己生産すること、運動は矛盾であるということ、矛盾を止揚する。ということは、運動を、そして物質そのものを投げ捨てるということの意味せねばならない。

だから、この矛盾は不斷に定立され、同時に解決されて行く過程、それが変化であり発展である。それゆゑに運動が物質に個有であり、普遍であり、運動をのぞいて、変化、発展は考えられない。したがつて、「物質に適用し得る運動とは、変化一般のことである」^⑤運動が変化一般を意味するものであれば、運動の諸形態は、機械的運動、力学的運動、場所的運動ばかりを意味しない。それは、物質の変化、発展に應じて、運動もそれに対応した形態をとる。と見なされなければならない。

上述によつて、存在の哲学的抽象概念として、物質とその運動を得たのであるから、今は、その物質に個有の運動を、それによつて変化、発展した物質の特殊な存在様式に対応する、運動の形態——それはつまり、物質の特殊な存在様式のことなのであるが——の変化を得ることが可能である。

〔注〕

- ① レーニン「唯物論と經驗批判論」『全集』第一四卷一五〇頁。
- ② エンゲルス『自然の弁証法』岩波文庫版下巻 一三七頁。
- ③ エンゲルス前掲②一〇一頁。
- ④ エンゲルス、マルクスへの手紙（一八七三・五・三〇）前掲②三二

四頁。

- ⑤ エンゲルス前掲②三〇頁。
- ⑥ エンゲルス前掲②三一頁。
- ⑦ エンゲルス前掲②三一頁。
- ⑧ 例えば、「自然淘汰説」に対する批判など、手近な所では、徳田御穂『改稿進化論』における進化論に対する批判及び反批判の紹介など、特に同書第四章―第九章四三頁―一五七頁を参照されたい。又、その他では、八杉竜一『ダーウィニズムの諸問題』理學社。又、教科書として書かれたものであるが、菊池立身『新稿・物質・生命・人間』二〇七頁―三〇三頁。などが参考になる。
- 又、「遺伝」の問題をめぐっての論争の歴史は長い。ミチューリン、ルイセンコ学派とメンデル学派との論争がその主要なものであるが、それについては、佐藤七郎「遺伝学と進化学」武谷三男編『自然科学概論』勁草書房三七頁―三九〇頁。徳田御穂、前掲第一章一八四頁―二〇九頁。外国の文献としては、P. Chauchard, "Precis de biologie humaine" 1957. 八杉竜一・八杉考三訳『人間の生物学―行動と思考の生理的基礎―』岩波書店、第三章三五頁―五二頁。J.B.S. Haldane "What is life?" 1947. の抜萃、八杉竜一訳『人間とは何か』岩波新書、第二部七三頁―一二二頁。これらのものは、論争そのものは扱っていないが、進化と遺伝の問題に触れていて参考になる。
- 又遺伝の問題における論争を主に扱ったものとしては、ネオメンデル会編『ルイセンコ学説』（生物学選書）北隆館。が資料が少し古いうらみはあるが、参考になる。進化と遺伝の問題を扱った文献は挙げれば、きりが無いほどであろうが、小稿においては直接に関係がないことと、門外漢の私には、右の論文のどれが、その事情に正確かどうかを直に判断するのはさしひかえなければならぬ。

- ⑨ エンゲルス、前掲②三一頁。
- ⑩ エンゲルス、前掲②一〇七頁。
- ⑪ エンゲルス、前掲②一〇四頁。

- ⑫ エンゲルス、「反デューリング論」『選集』第一一巻四八頁。
- ⑬ レーニン、「唯物論と経験批判論」『全集』第一四巻二〇七頁。
- ⑭ レーニン、前掲⑬二〇八頁。
- ⑮ エンゲルス、前掲②一二四頁。

(四)

ここで、われわれが上述において見て来たことを整理して置かなければならない。

まず第一には、存在における形式は、現実的存在物の自己発展において、存在物自らが作り出しているところの属性である。ということ。

第二には、弁証法とは、ヘーゲルのそのように、精神（絶対的存在者）の抽出行為によって物質（存在物）が定立され、それが自己のものと、「とりもどされつつある仮象」なのではなくて、つまりヘーゲルにあつては、そのような観念的存在が実際の歴史における諸物として実在し、それが自己完徹性をもって絶対的理念に到達し、そこで完成される。とされるのであるが、実はそうなのではなくて、宇宙に実際に存在する物質が、その自己発展において、一つの島宇宙において、星雲から思惟する有機体までに、実際の物質の弁証法的運動において自己完徹的に発展して来たのであるということ。であるから、ヘーゲルの弁証法がびっくり返えつて、物質そのものの運動の仕方に転化するのだということ。

第三に、そのような物質が量から質へ、又その逆の転化、という運

動、対立物の自己生産、その相互滲透、闘争という運動、そして矛盾を不斷に定立し、それらの発展において解決して行く過程、それが無限に多様性と複雑性を可能にしながら、言いかえれば、無数に重なりあい重複して行くラセン型の存在構造をとりながら、発生から消滅への運動をくり返しているのだ、ということ。

そして最後に、それら自然の存在物の運動は、われわれ人間もその内に含まれてい、われわれの脳がそれらの映像を持つてが持つまいが客観的に、すなわちわれわれの意識や観念に対して独立に実在するのだということ、そして、これは次稿でくわしく述べるつもりであるが、意識とか観念とかは、それら客観的実在が脳に与えた、云わば被写体の像である。ということ

しかし、物質とか運動とかは、われわれの感覚において与えられている諸物とその運動諸形態とを総括する概念、すなわち哲学的抽象物であって、物質、運動、そのものは経験されないものである。ということ、

だから、実際は、物質は、その特殊な運動諸形態をもってわれわれに対して現れているのだから、その現れ方、すなわち運動形態を認識すれば、それが何であるかを認識し得ることになる。だからといって、その運動形態の内容を見なくて良い、というのではなくその内容、物体そのものが、それら特有の運動形態をもって実在しているのだ、ということなのである。

このように見て来ると、それら運動諸形態を見ることによって、或

る物質が何であるか、全発展過程のどの位置にあるかを知ることが可能である。すなわち、物質の特殊な存在様式（運動諸形態）を、自然史の必然的發展過程の内に位置づける為には、複雑多様な諸物が、最初から個々ばらばらに不変個別に存在し、その時々偶然の諸条件によってのみ相互に関連性を持つ、と解されるべきではなく、それら諸物を貫く運動という概念によって統一され、発展によって位置づけられていなくてはならない。^①

このように見て来るとするならば、運動とは、単に「力学的運動」が唯一の運動形態ではなく、「この運動一般の一つの特殊な形態」であるにすぎない。だからさらに、「生命的運動、意識的運動——厳密には生産的運動——などの特殊形態をあげることが出来る……この運動一般のかかる特殊化の過程、すなわち物質の段階的な形態転換の過程が、自然の弁証法的な発展過程なのであるがゆえに、絶対的な物質の存在形式（様式）としての運動は、その時間的空間的な展開、すなわち物質の具体的な歴史的過程そのものである。」^②

そして、これら諸物がその個有の運動において変化、発展する。ということだが、不変であり永久的であるならば、この歴史的過程は、物質の運動が、絶対的には、不可逆であることを意味しなければならぬ。

仮にわれわれが、頭の中で時間を逆転させ得たとしても、又例えば実際に時計の針を逆転させたとしても、時間そのものが、実際の物質の運動に根ざしていることをやめないかぎり、不可逆的であるのと同じ

様に、物質の運動は不可逆的である。

そして諸物の運動が、全宇宙的運動から素粒子運動に到るまで、無数に重なり合ったラセン型の循環の中においてのみなされるもの、とされるならば、諸物とその諸対立物との矛盾関係を同時に解決しつつある過程が、まさに運動であるならば、又例えば、一粒の麦が自分がそのまゝで止まることを否定し土地との又は空気中との間で物質代謝を行いつつ自分を否定し発芽させ、開花させ、又そこで止まることを否定することによって幾倍もの麦粒を得てわれわれの食前に登る、というこのような否定の否定の形態転換が、まさに運動であるならば、これら全ての例が示すように、物質の運動が不可逆的であることの外のなにごとでもあり得ない。

物質とその運動の発展、それが歴史的過程そのものであると云うことは、「物質の運動とは、たんに粗大な力学的運動や、たんなる位置変化だけではない。それは、熱であり、光であり、電気的および磁氣的張力であり、化学的結合分解であり、生命であり、そして最後に意識である」から「運動の不滅性とは、たんに量的に理解されるのみではなく、質的にも理解されなければならない」^③のである。だから、力学的運動が、一定の条件のもとで、熱に、電気に、化学作用に、生命に、そして意識に変化、発展しないならば、その運動は破壊されたのである。しかし物質の無い運動も、運動の無い物質も考えられ得ないのであるから、前述の時間的空間的發展、つまり歴史的過程は、必然であり、不可逆的でなければならない。

この様に、物質と運動の形態転換の過程は、物質と運動の複雑化への過程であり、又多様化の過程である。

前述までに見て来たように、物質の自己産出行為、運動の自己転換行為、これは、現実の諸物の歴史的発展過程が、弁証法であることの外のなにごととも意味しない。この様に自然を弁証法的に捉えて来ると、その発展の過程には、段階があることがわかる。すなわち、無機物質の段階、有機物質の段階、思惟する有機物質（人間）の段階がそれぞれある。それは、天体史、生命史、社会史として捉えることも可能である。^④そして、この発展のそれぞれの段階における諸物は、その内に、自分が通って来た全過程の運動様式をわがものとして持っている。その持っている運動様式によってのみ自分を現し、又発展（進化）も可能にする。しかしその前に、その内容の発展が置かれることは云うまでもない。そこでその持っている一つの要素が欠けても、その運動形態によって自分を現している本質を変える。「人間はあらゆる種の基準にしたがって生産することを知っており、いたるところで固有の基準を対象にあたえることを知っている。だから人間は美の法則にしたがっても形づくるのである」^⑤という言葉は、直接的にはこの事情を云い表わしてはいないにしても、教示的である。^⑥

さて、これらの諸段階に対して、科学が対応する。と云うのは逆に云えば、科学の「対象は運動する物質。物質そのものの様々な形態と種類とはこれまた運動を通じてのみ認識される。ただ運動においてだけ諸物体の諸特性は現れる。運動しない物体については語り得ない。

それ故に運動の諸形態から運動する諸物体の性状が出てくる。^⑦だから現実の諸段階によって科学がそれぞれの位置を占める。又逆に云えば、科学を分類するということは「諸科学の各々が単独な一つの運動形態或は互に同じ組に属し、かつお互いの間で移行し合う一連の運動諸形態を分析するのであるから、これらの運動諸形態そのものの、それらの内属的な序列に従っての、分類であり配列である」^⑧から、物質の運動諸形態の各段階に科学が対応するのである。

そして、この科学の歴史が一つの弁証法的な展開を示している。^⑨そのことによって、科学自体が一つの歴史の中に組込まれて行くことになる。と云うことは、自然科学の場合で云えば個々の諸領域がまさに物質の運動のこのような弁証法を反映しているのであり、その歴史的発展をも、現実の物質の近似的コピーとしての自然科学の発展の歴史が、その本質把握に到る弁証法的過程において反映している。

このような意味においても、又科学自身の進歩発展によっても、個々の諸科学は相互に関連をなして統一されていなければならず、又、その相互領域が互いに滲透し合っていることが理解される。この科学自体の自己変化をも必然ならしめている。

このような諸科学の対象としての諸物と運動諸形態の底を流れているものこそ、存在の哲学的概念であるところの物質であり、その運動の法則性が弁証法なのである。

〔注〕

- ① エンゲルスは『自然の弁証法』岩波文庫版上巻九〇頁において、「最も一般的な意味での運動、この意味にあつては運動は物質の現存様式として、物質の内属的な属性として、捉えられ、宇宙に行われている諸変化や諸過程の一切を、単なる位置変化から思考までを、その内に含む」と述べている。なお引用以下、及び、同書一〇三頁、同下巻八頁などを参照されたい。
- ② 梯明秀『物質の哲学的概念』青木書店三四頁〜三五頁。(一)内玉水。
- ③ エンゲルス『自然の弁証法』岩波文庫版上巻四二頁。同「反デューリング論」『選集』第一二巻八五頁。
- ④ 小稿「はじめに」及びその注⑫⑬を参照されたい。
- ⑤ マルクス『経・哲手稿』『選集』第一巻九二頁。大月版選集補巻四三〇七頁〜三〇八頁。
- ⑥ エンゲルスもこのことを、『自然の弁証法』岩波文庫版下巻一二九頁において「有機性はたしかに、力学、物理学、及び化学、を三者がもはや分たれ得ないような一つの全体へと自己のうちへとり入れる一層高次の統一である」と述べている。
- ⑦ エンゲルス前掲③下巻一二五頁。
- ⑧ エンゲルス前掲⑦一二七頁。
- ⑨ 武谷三男「ニュートン力学の形成について」『弁証法の諸問題』理想社を参照されたい。

おわりに

本稿の以上において述べて来たことは、「存在」の概念の明確化という課題を充分に果たしているとは云いがたいであろう。しかし一応は、「存在」と云う範疇についての説明になっているかと思われる。

「存在」とは「存在物」を言い表す哲学的概念であること、そして「存在物」とは「物質」という概念によって統一的に捉えられる現実の諸物（人間も含めて、それが一般的通念としての物理的物質をのみ意味しないのは当然である）であること、そして、この多様性と複雑性は、その発展、変化によって与えられたものであること、そしてその変化、発展に諸物の形態とその運動様式が対応していること、だから、それら諸物がわれわれに対して現象する時、一定の運動諸形態をもって現れるということ、ゆえに、「運動とは存在の様式」なのである。ということなどが明かになった。このようなことから、われわれが諸物について語ろうとすれば、諸現象の内実を捉え、その内的連関を明かにしなければならないだろう。この上で、その諸物の本質が捉えられる。

しかし、本稿において見て来たように、哲学的物質の概念だけでは、「意識」や「実践」——それを人間的運動様式として総括しても——のそもそもの土台としての「物質」——存在の概念がそれ自体自己運動を起す訳ではないのであるから、その現実における意味内容は何一つとして説明しない。

総括的に述べるのが許されるならば、物理学の物質、化学的物質、生物学的物質、社会科学的物質。などで枠づけられる個々の諸物とその内的連関は、それら諸範疇の科学が明かにしつつあるものを除いては何もわからない。物質の歴史的発展の段階が、この諸科学の範疇として対応するのであるならば、個々の範疇が相互に滲透し合って行く

結節点の問題は諸科学の境界線の問題に対応する。だから、その境界線の問題は、それぞれの段階の起源の問題に重なり合ってくる。

物質そのものの起源の解明は、宇宙存在そのものの構造を明かにするであろうし、^①生命の起源の解明は、無機物質から有機物質への発展の謎を明かにするであろうし、それはオパーリンなどによって進められている。^②そして更に、人類の起源の問題は、進化と遺伝の諸問題を、^③更に社会の起源の問題を解く鍵を与えてくれるであろう。

このように考えて来ると、諸科学は、そのすぐれて現実的な課題に對する解決の鍵を、その起源の問題を解くことによって得られる。と言い得ることが理解されよう。

人間のあらゆる活動の内でも、まず生きる為の生活の生産、それが自然の一部による自然の消費という物質代謝をもって可能となるとするならば、そしてそれを「労働」と呼ぶならば、人間はまず「労働」する。つまり生産的实践は、対象に働きかけ、その対象の持っている本質とその個有の存在様式を利用して、自分の目的に合うように作り変えて行く、その過程で人間はその対象の認識を獲得する。その認識は次の実践で確められる。認識が正しくなければ、その実践は失敗する。

このような人間的運動様式は、物質運動の発展における生命的矛盾を、その内に含んでいる。その人間への発展は、その矛盾を止揚するのではなく、その矛盾が、そこで運動しうる形態を作って行くのである。これは、自然による自己二重化の矛盾を、外的には、自然と人

間との対立を生産する。この対立においては、人間にとっては必要な使用物の材料を自然が与え、それに人間の欲望が対応する。そして一方においては、人間にとっては消費材料と欲望との統一である。例えば、パン（自然物と仮定して）は人間にとって、実在的には食物であり、その有用性は、その実在的な欲望として、対立的な食欲の大きさに連関させる時、抽象的に現象する。一方食欲の大きさは、有機体を維持する為の内的必要性の尺度として意味を持つ。だから、それは実在的な人間の欲望である。その現実的発現は、その実在的な必要性の範囲で、その対象としての表象的な食物に連関させる時、意識的に現象する。これが、具体的にパンが人間によって食べられる、という実際の過程において外的統一を完成する。このような自然材料と人間の欲望の対立的な形態は、自然と自然の一部（人間）との物質代謝の現実的な運動形態なのである。

このようにして人間は、自分の対象——観念のではなく実在の実体としての——に働きかけ、その本質を把握することによって、具体的に自分のものとして行くことが可能となる。このような生産的实践抜きには、人間は生きて行くことができない。その内で現れる認識過程は、諸物の内的本質を見破ることによって実践の成功度を高める。

このような人間活動の基本的原理は、あらゆる人間の活動においても支配的に振舞う。それは科学的実践においても、政治的实践においても変らない。

〔注〕

- ① J. D. Bernal: *The Physical Basis of Life*. 山口清三郎・鎮目恭夫訳『生命の起原』岩波新書一五頁―一六頁。エンゲルス『自然の弁証法』岩波文庫版上巻一七頁―四六頁。及び武谷三男編著『自然科学概論』第二巻勁草書房、三二四頁―三五頁。などを参照されたい。
- ② オパーリン『生命の起原と生化学』岩波新書、同『生命——その本質、起原、発展——』岩波書店、前掲武谷三男編著、三五一頁―及び前掲バナル、などを参照されたい。
- ③ Camille Arambourg: *La Genèse De L'Humanité*. 寺田和夫訳『人類の誕生』文庫クセジュ。
Paul Chauchard: *Sociétés Animales, Société Humaine*. 吉倉範光訳『動物の社会・人間の社会』文庫クセジュ。
武谷三男編著前掲三七頁―四〇四頁。井村恒郎他鑑修『現代人間学』第一巻『人の進化』みすず書房。今西錦司『人間以前の社会』岩波新書、今西錦司は、その序におこつて Margaret Mead 1949 "Male and Female" の第九章 "Human fatherhood is a Social invention" を紹介して人間社会の起原論で先鞭をつけられたが自分の生物学的アプローチはオリジナルなものだと述べている M・ミード田中寿美子訳『男性と女性』上巻東京創元社二三五頁―二五六頁。梯明秀『社会の起原』青木文庫、など参照されたい。特殊なものとしては A. Portmann: *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. 高木正孝訳『人間はどこまで動物か』岩波文庫が面白い問題提出をしている。なお、意識については、パヴロフ『条件反射』新潮文庫版を中心にして、ショシャル、ルビンシュテイン、キセリンチェフ、J・B・S ホールデン、T・ノヴォグロツキー、J・Z・ヤング、チェブプロフ、などが参考になる。

(未完)

〔補記〕

小稿は、一九六一年の六月から七月にかけて、あの「安保闘争」のさなかに書かれたものである。当時私は、日本社会事業大学の研究科の学生であった。その頃、副田義也氏を中心とする「社会構造研究会」というのがあって、その研究機関紙として「新興科学の旗のもとに」創刊号が、同年十一月に発行されている。小稿は、その研究機関紙の原稿として書かれたものである。

その頃私は、科学者の「実践」とはなにか、それはどのようにして可能になるのか、という課題に悩まされ続けていた。この「実践」を基本的なキー概念として、「実践——認識（意識）」「認識（意識）——存在（社会的存在者としての）」を考えようとしていた。それは、人間における「存在」「意識」「実践」という基本的な概念が、私の不勉強もあって社会科学のなかで必ずしも明解にされていないように思えたこと。また当時の時代認識としての、科学者の社会的実践へのするどい問いかけと科学者たちのそれに対するさまざまな対応が、さしせまった現実の問題として私たちの前にあったこと。などが、この小稿を序説的な一部とする「人間論の科学的基礎づけ」をめざした「存在・意識・実践」と名づけられるはずの研究に手をつけるきっかけとなった。

「存在」の歴史的発展のカテゴリーである、物質・生命・意識という縦軸の系列を確認したうえで、今日的横軸として、存在・意識・実践を置くことによって、人間存在の時空連関を画きだそうとする意図

がこめられていた。しかし状況は、私の個人的事情も含めて、書斎派的な「本読み」のみを許さないものがあったし、またこの私の課題を現実的なフィールドに移しまさに現実的、実践的に糸口を探る方が、より生産的であることを示唆する人もあって、私は、その現実的なフィールドを、壮大な階級闘争として展開されていた三井・三池をはじめとする炭鉱労働者たちに求めた。

こうして小稿は、私の記憶のなかの廠舎で捨てられもしないが、これ以上に進みもしないままほっておかれた。それをいまこうして印刷にかけるのは、私にとって研究上の一つの整理の意味をもっている。したがって、内容にもあえて手を加えないままにした。私にとっての若干の気がかりは、これが地中から呼び出された魔法使いの弟子にならないければよいということだけである。